

序

日本人は、目標設定されるとその達成に異常な組織力を発揮するが、目標設定そのものは苦手だと言われる。また数年前、新聞のコラム欄で日本の企業の新規事業に対する姿勢に触れているのを見た事がある。『米国のように、既存の事業とはなんの関連もない企業を買収して、その分野に進出するといった例はあまり見られない。日常の生産活動からしてそうだ。QC運動のように積み重ねてゆくことは得意だが、もう一度飛躍するのは苦手。生産技術は優秀だが開発力は弱いという評価が生まれるゆえんである』というものであった。一般には開発は極めて目的的な行為で、目標も明確に設定されている場合が多いので、冒頭の文脈とは矛盾するが、ここで言う開発力は、飛躍を要する創造的行為と解釈すれば、同じ含意とうけとれる。

このような批判が正しいかどうかは議論の分かれる所であるが、思い当たるふしのあることは確かであり、考えてみるべき問題のように思われる。ここで共通に問われていることは、結局は日本人の世界観あるいは問題意識であり、その培われた土壌ということであろう。何を不思議と思い、何に疑いを持つかといった、現象究明に対する執拗な生活態度の欠除が問題とされているようだ。これは経済大国に象徴されるように日頃、生産性あるいは効率といった所に価値基準がおかれ勝ちの社会風土による所が大きい。得てして、何が出てくるか分からないような努力に対しては評価され難く、極論すると勝てば官軍式の論理が横行することにもよる。しかしこうした風潮は、科学と技術の成立過程を学ぶことなく、その結果だけを同時に西洋から輸入した日本の近代化における教育制度に起因するという科学史家の説もある。日本の教育はある意味では水準は高いが、教育内容は往々にして知識体系の結果の習得であり、体系化の過程の学習には比較的無頓着である。

こうした観点から研究活動に限ってみても、もう一度問題意識の再確認はあってよさそうである。たとえば、活性化され挑戦的な企業のみ、今後社会に何かを提案し生き残って行く資格があるものとすれば、そうした企業の中でこそ創造的な研究活動が展開されることが期待される。結果だけを問題にし、はっきりした答の出ることだけを研究対象とするようなことであれば、もはや研究という名に値する活動は無くなったと考えてよい。

1986年10月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦